みんぱく インタビュー

民族学の枠を超えて

ボン大学元日本文化研究所所長のヨーゼフ・クライナー氏は、日本研究を通じて、民博の創設以前から当館にかかわり、特別展「ケンペル展」や「シーボルト父子の見た日本」、また谷口シンポジウム文明学部門などで民博の活動を支援してこられました。そこで、開館から三〇年の歩みを踏まえ、次の展開を考えるうえでのお話をうかがいました。

ヨーゼフ・クライナー
Josef Kreiner
法政大学特任教授

中牧弘允
Nakamaki Hirochika
本館民族文化研究部

—民博も開館から三〇年経って、その次を考えるときに、長く民博にかかわってきていただいているクライナー先生の、お考えをお聞かせください。

文化外交としての博物館機能

わたしは、梅棹先生の頭のなかで少しずつ民博のかたちができあがってくる誕生前から民博と親しい関係にあるし、日本研究を続けてきた三〇年間、民博はいいパートナーだったし、先生でもあった。そういう関係にあるから、これからの民博にも大きな興味をもっているし、わたしが何か少しでも恩返しできればと思っております。

民博の展示について言うと、展示されているモノが多すぎるという意見もありますが、これでいい、今でも通用すると思います。例えば、「日本の文化」展示の祭りと芸能のところへ行くと、祭りのインパクトを強く受けます。ショーケースに入っていない点が非常に大切だと思う。今後手を入れてもらいたいのは、ヨーロッパ展示です。ヨーロッパから日本が受けた影響は非常に大きかったから、これを紹介する必要がある。

グローバリゼーションを紹介する必要があるという議論もありますが、日本文化のグローバリゼーションを展示するには、また別の博物館が必要になるでしょうね。

—日本展示の最後に、特別展「多みんぞくニホン」のような企画をもってきて、在日外国人の展示をやるという手もあります。

民博は日本にひとつしかない民族学の博物館ですから、一般の人はもちろん、政治家や外交官のシンクタンクの役割を果たさないといけない。ですから、多民族文化日本の問題を強く出した特別展などを、政治家にアピールしてね、民博に来ないとサミットに参加できない、というくらいにする。民博は自信と使命感をもってやらなくちゃと思います。

—文化をとおした外交、一種の文化外交ですね。ヨーロッパでは博物館がそうした機能を果たしていますか?

少なくともフランスは、他の国より意識している。新しくできたミュゼ・デュ・ケ・ブランリー(ケ・ブランリー博物館)には元ミュゼ・ドゥ・ロム(人類博物館)にあったモノを展示してある。フランスは外交としてああいう博物館・美術館をもっているし、アピールしますよね。

—今のお話は、民博は、ただ民族学の博物館や研究所というだけではなく、外交とか国際的な関係のなかでの立場を考えるべきだ、ということですね。

誕生以来、民博は博物館か研究機関かの議論があるけれど、展示と研究をうまく新しいひとつのかたちにしなければならない。そうすると外国の博物館に対しても大きな意味をもってくる。モノを集め、整理し、展示するだけでなく、モノを生産している文化を研究する、こんなに大きな研究部をもっているところは、外国にないですよ。

大事なのは、博物館をもっていること自体が研究所にとって迷惑なものではなく、非常に大切な一面であることを意識することです。

—かつては博物館と研究センターが車の両輪だったのですが、最近は「博物館をもっている研究所」という言い方をするようになっています。これは戦略の変化です。

長期の学際的共同研究を

おそらく、民博はアチック・ミューゼアム以来の、しかも規模をはるかに超える試みじゃないですか。渋沢敬三先生もオーガナイザーとして学際的に当時は共同研究とおっしゃって、日本民族学会・人類学会の連合を進めた。戦後は、六学会とか九学会連合の共同調査があったけれども、残念ながら時代が変わって、学会同士の連合の必要が少なくなり、海外調査の可能性も増えたので、九学会連合は解体・解散した。今や、学際的な研究はこの民博でないとできないんじゃないかな。研究者にしても、民族学、文化人類学の出身だけでなく、歴史、情報科学、考古学出身の先生もいたりした。

—以前は、佐々木高明先生が中心で進めた「日本民族文化の源流の比較研究」、祖父江孝男先生などが推進した「現代日本文化における伝統と変容」というふたつの特別研究にくわえ、民族学と文明学の二部門の谷口シンポジウムが走っていた。

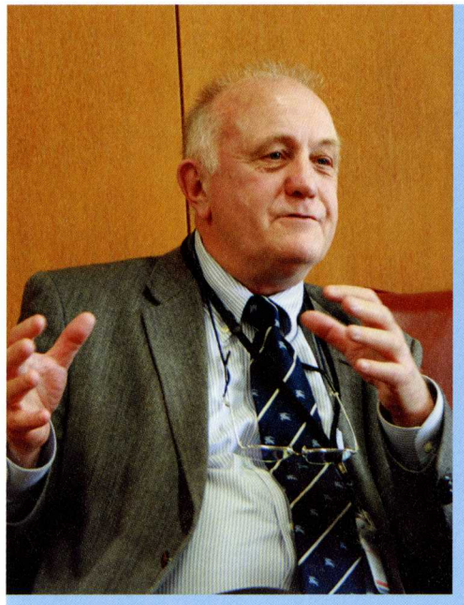
ああいう、今すぐ何か成果を出さなくてもいい長い目での共同研究プロジェクトを民博は続けていってほしい。二一世紀の今、民族とは何かを考える必要がある。例えばバルカン半島に行くと、共通の文化をもっているけれど激しく競り合っている。いい意味の場合もあるけど、場合によっては殺し合うまで戦っている、基層文化は同じでもエトノスは違う。つまり、民族とは何か、というような民族学がずっと抱えている基礎研究を民博は長い時間幅で続けなければならない。もちろん応用研究も必要で、さきほどの政治家向けシンクタンクの提案は応用研究だけれど、長い目の基礎研究がないと応用、助言も出すことができないから、両方必要ね。

—最近は、短期間で成果を出せという、悲しい風潮があります。

これは日本だけでなく世界中でも同じでね、ドイツの大学でも、日本研究をやると、毎年卒業生は何人、博士は何人、とすぐ問われる。ドイツ文学をやる人に比べると遙かに少ない、じゃ予算はいらないじゃないか、とかね。

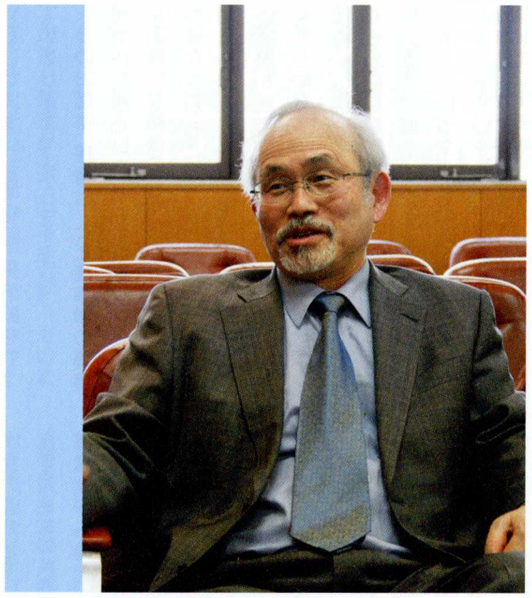
—それに対してどんな対抗手段を講じるか、ということですが、単なる成果主義ではない存在価値をアピールするために、ドイツではどうされているのでしょう。

大学よりも、博物館には利点がある。ド



ヨーゼフ・クライナー

1940年オーストリア・ウィーン生まれ。法政大学特任教授。ドイツ・ボン大学日本文化研究所所長などを経て現職。ヨーロッパのみならず世界における日本研究の泰斗。著書は『日本民族学の現在』(新曜社)『江戸・東京の中のドイツ』(講談社)ほか多数。



イツでもときどき世論調査をやるが、大企業がハイテク工場や本社をどこへもって行くのか、結局文化が栄えているところにもって行く。例えばフランスではマルセイユよりもパリですし、ドイツだったら地方博物館でもいい、文化のあるところです。ボンが非常に強いのは、東西統一で政治の中心がベルリンに移ったときに、土産としてボンには新美術館とか近代史博物館を残した。文化の中心はボンにあって、企業もそこにくる。テレコムはボンに本社をおいたんですよ。もちろん、交通アクセスとか土地のこととか経済の要因もありますが、文化も非常に大切ですね。

―従業員とその家族、あるいは経営者が住みたい町という意味ですか？

いいサラリーマンを雇うことができる。教養のあるサラリーマンの家族や子どもたちは、博物館、美術館が近くにないといや、山の奥には行きたくない。文化は経済の基盤にもなるんですよ。

―アメリカでも最近、リチャード・フロリダが、『The Rise of Creative Class』という本を書いた。日本語訳『クリエイティブ資本論―新たな経済階級の台頭』も出ていますが、そこでも、クリエイティブな人たちは、美術館がありコンサートが聴ける、文化的な楽しみができる町に住みたいという、同じような分析をしています。似たようなことがボンでも言えるのですね。

博物館でもイベントを催す。東京国立博物館でも、バッハ、ビバルディなどクラシック音楽会をやる、それでいいんです。ボンでも新美術館の前にテントを張って、五月から九月の気候のいい時期に定期的に音楽会を開く。クラシックだけでなく、エルトン・ジョンなどポップの一流の人を呼んで沢山の人を集める。ふだん博物館に行かない人がエルトン・ジョンを聞きに行く。チケットで博物館にも入館できる。そこで新しい人が育っていくんです。

―そういう人たちを引きつける魅力を演出するときに、博物館は大学とはちがう機能を果たしているんですね。

メタ・サイエンスとしての日本学

―クライナー先生は、ボン大学を定年退職後に法政大学の21世紀COEプログラムにかかわっていたそうですが、どんな研究をされているのでしょうか。

法政大学では「国際日本学研究」というテーマで予算をいただいています。これは下手をすると国際日本文化研究センターの二番煎じになる。でもよく見ると、日本についての研究ではなくて日本学についての研究、メタ・サイエンス（学問自体を研究対象とする学問）ですね。日本のどこにもない研究です。日本でも諸外国でも、日本学という学問はどういう条件の下で生まれ育ってきたのか、それぞれの国での日本研究の相違は何か、そういうテーマです。でも、すぐできるものではなく、例えばドイツにおける日本研究の性格や本質を語るには、ドイツの学問体系全体を考えねばならない、独文学者も経済学者も参加してもらわないといけない。

―ドイツ、フランス、イギリス、それぞれの文化を反映した日本学は、ちがうかたちをとっているはずだ、というわけですね。

諸外国でも一冊の本が注目を浴びることがある、中根千枝先生の『Japanese Society（日本社会）』、そのもとは『タテ社会の人間関係』ですが、ルース・ベネディクトの『菊と刀』、ケンペルの『日本誌』、みなヨーロッパ中で読まれています。フランスの日本研究者、人類学者ロラン・バルトが、『ラ・アンピール・デ・シーニュ（印の帝国）』を出してフランスでベストセラーになった、ところがアメリカでタイトルを英語読みにして『Empire of Signs』で出版したら全然売れない。フランスの教養のある人の文化とアメリカのそれとは全然ちがうからかな。

―同じ日本研究でも、ヨーロッパでやるのとアメリカでは全然ちがうところがある。そこから文化における学問のなりたち、基本になっている教養や学問体系をあぶり出せる。

法政大学の研究プロジェクトでもそういう問題意識があるけども、あまりに視野を広げすぎるとまとまりにくい。ドイツとフランスにおける日本研究と、中国における日本研究はまったくちがうでしょう。『魏志倭人伝』もある意味では日本研究かも知れませんが、日清戦争のあとに日本が注目されるようになったヨーロッパとはまたちがうでしょうね。

トランスナショナルな日本研究者

―グローバル化の時代では日本研究はどうなるか。これまでは、自分たちの文化アイデンティティを一所懸命さぐろうとした。しかし今は、グローバルなコンテクストのなかで日本文化を考えようという意識が強くなっていますね。

一九世紀後半、日本ではお雇い外国人、ヨーロッパ、アメリカでは地元の文献学者が日本研究を始めたけれど、この人たちは往々にしてマイノリティに属した研究者だった。例えばロシアの日本研究はユダヤ系、ドイツでもユダヤ系、オーストリアでは周辺のチェコ、クロアチアの人たち、フランスではアルザスの人が多いですね。わたしの解釈では、当時はある程度教養ある家系の出身でないと医学や法学方面には進めなかった。ところが、周辺領域の研究で故郷に錦を飾ったのは、そういう背景のない人たちだった。アメリカではドイツ系移民の人たちがライデン大学で研究しアメリカに日本研究をもって行った。ロシアから亡命してしばらくパリにいてアメリカに行ったS・エリセイエフ等々、そういう人たちがやっていた。

でも今は研究者としての地位が確立した人たちが日本研究をしている、そして女性がたくさん日本研究をしていますね。

―そうですね。JAWS（Japan Anthropology Work Shop）やAJJ（Anthropology of Japan in Japan）なんかを見てると、日本の農村研究をする人が少なくなって、マンガ、アニメ、コマーシャルとかのポップカルチャーを研究する人がものすごく増えていると思います。

これは、むしろ歓迎すべきだと思います。わたしは五〇年前に日本研究に入ったけど、たいていの学生は黒澤明の映画に刺激されて、サムライ、ゲイシャのイメージをもって日本研究に入った。われわれは、日本は近代化しているし、フジヤマ・ゲイシャとちがうんだ、と強く反対しましたが。

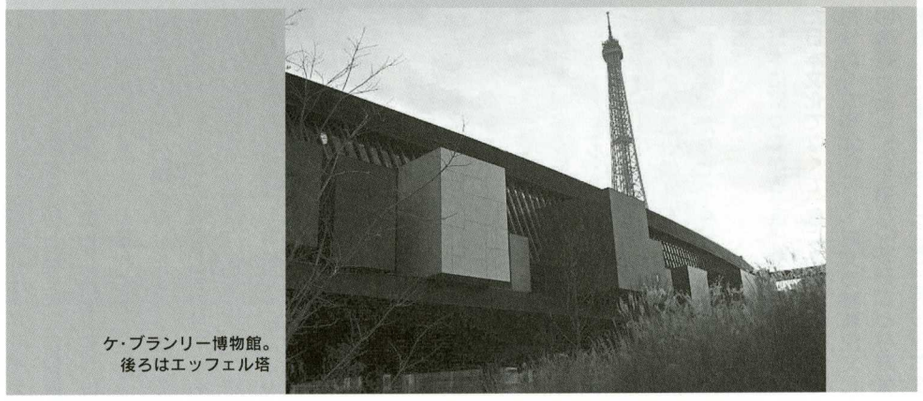
今は学生の半分以上が、将来はマンガ家になりたい、マンガの翻訳をやりたいとか、アニメのドイツ語訳が正しいのか皆が疑問をもっていて、オリジナルを知りたい、聞きたい、そこで日本語の勉強を始める。その意味ではポップカルチャーは入り口として良い。ボン大学にもそういう学生は多いです。

―最近の日本研究を見ていると、日本研究者にはトランスナショナルな人が増えているように思います。クライナー先生の場合も、もともと伝統的なウィーン学派の民族学を修めた人が、ウィーンを離れてボンに行ったり日本に来たり。同じような人が増えてきているように思いますが。

パリのシャルル・ドゴール空港の書店にならぶ漫画

確かに増えていますが、むかしはまったくいなかったとも言えないですね。大正四、五年ごろに帝政ロシアから日本に留学してきたニコライ・ネフスキーは日本に残った。ロシアのエリセイエフはフランスで活躍して最後はエール大学に移った。みなトランスナショナルですね。

―むかしはずっと同じところにいる人が多かったけれど、ワンダーフォーゲルじゃないが渡りをする研究者が出てきている。



ケ・ブランリー博物館。後ろはエッフェル塔

る。労働者だけでなく、研究者もグローバル化の波に乗って行き来する。これもひとつの現象かな、若い人も含めて。

自分の可能性を求めたい、あるいは、もっと勉強したい人たちですね。むかしのドイツのハントヴェルク（手仕事）では、マイスターになる前に放浪してあちこちの徒弟になって技術を身につけねばならなかったようにね。

比較研究の歴史を踏まえる

―インテリの移動もそうだけれど、グローバル化すると、日本研究というだけではアイデンティティが保てなくて、中国研究とか韓国研究、ひいてはアジアのなかの日本研究という位置づけを戦略としてもたないとやっていけないようなことがあるんでしょうかね。

柳田國男先生は『民間伝承論』のなかで、我々のやっている学問は将来、比較民族学まで発展する必要があると昭和一〇年に言っている。柳田自身はそのステップまでもっていけなかったけれど。岡正雄先生も、君たちの日本研究はおかしいとしょっちゅう怒っておられた、先生はアラスカとかよく行っておられたから。わたしも努めて周りを視野に入れようと思っていますが、やはり一人ではできない、そこで共同研究が必要だと思っています。

ハインリッヒ・フォン・シーボルト没後100年国際シンポジウム
（主催：法政大学国際日本学研究センター・国際日本学研究所―法政大学市ケ谷キャンパスにて開催）

わたしも、稲作研究でフィリピン、ブルネイ、ボルネオ、サラワクに入ったことがありますが、教えていただいたのはウィーンのハイネ＝ゲルデルンという歴史民族学の大家です。フィリピン奥地の段々畑の棚田は今世界遺産になっていて、あの展望台に行くとハイネ＝ゲルデルンの論文を引用したブロンズ板が貼ってある、うれしくなってね。日本のフォークロアが結局行き詰まったのは、その点ですよね。「一国民俗学」という言われ方をしますけども、最後は宮田登や坪井洋文も中国、東南アジア、稲作を視野に入れたり、韓国、朝鮮半島を調査してるんですね。

―民博では特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」がありましたが、その評価はどうなんでしょうか。

少なくともわたしは非常に高く評価している。昭和の初めからを考えてみる総決算のようなシリーズですよね。もちろん、佐々木高明先生はこれを踏まえたうえで『南からの日本文化（上）新・海上の道』を書いておられるけども、その後は新しい研究プロジェクトは出てないですね。

―そういう意味では、岡正雄は柳田国男を少しシフトしたかたちで日本文化を考える、比較研究という点ではひとつの結節点におられたような気がします。そういう伝統が今はちょっと薄れてきている。

そこで民博の話に戻りますが、日本の民族学の一〇〇年の歴史を再評価する必要がある。民族学自体だけじゃなくて、政治史、外交史、植民地も含めてやらなきゃいかんですよ。その研究をやったうえで、これからの日本の民族学のあり方がわかってくるんじゃないかな。それをやれるところは民博だけじゃないですか。

―最近感銘を受けたのは、赤坂憲雄氏が書いた『岡本太郎の見た日本』という本です。岡本太郎は太陽の塔で有名だけど、単なる芸術家ではなくて、パリで一九三〇年代にマルセル・モースについて民族学を勉強したし、彼の親友はジョルジュ・バタイユで通過儀礼というか秘密結社の儀式を受けたりしたという体験をもっている。

日本に帰ってから、近代主義に汚染された日本文化でなくて、底にある日本文化を知りたくて東北に行き、縄文の狩猟民文化には嬉々とした生命力のあることを発見する。次に沖縄に行って、ただ木と石ころが転がっているところに神が降りてくるウタキに感動する。次に朝鮮半島に行き、村境に二本の棒が立っているチャンスンに注目する。生命力にあふれた人びとの生活がそこにあるんだと。これは民族学者としての岡本太郎を掘り起こした面白い本で、岡正雄にもつながってくる。

自分がどういうものであるか、それこそ坪井正五郎あたりが構築してきた研究の歩んできた道を基礎に、民博で続けてほしい。

皆で一緒に考える

今、ヨーロッパはひとつになってきている、議員たちも交流を深めている。でも日本の議員の方々は、ヨーロッパに対する日本の位置づけをどう言えばいいかとまどっていて出遅れている。わたしはドイツ大統領と一緒に日本に来たことがあった。晩餐会で、日本の大臣すべてが、ケンペル、シーボルト、ベルツ博士を引用する、日本はドイツから学んだことばかりのべる。でも近現代に入ってからドイツは日本からトヨタイズムとジャストインタイム生産方式（トヨタ自動車が考え出した、必要な物を必要な時に必要な量だけ生産するという効率的な方式）とかたくさん学んできた、と大統領が強調した。

今は、誰が一歩先を歩いているか、誰が後ろにいるか、他者を見て何を学び取ることができるかという時代ではありません。大変な問題を皆で一緒に考えないといけない時代です。

そこで日本は外国に研究所を置く必要があるのではないかと思う。例えば中国、インド、ヨーロッパに、民族学者だけでなくいろいろな分野の人を送って。民博が先頭に立ってこういう企画を進めてほしい、そこでは若い研究者も育成するんですよ。

―企業はやってますよ。例えばオックスフォード大学にニッサン・インスティテュート・オブ・ジャパニーズ・スタディーズ（日産日本研究所）がある。民博も初期には各地にブランチ・ミュージアムを作ろうという構想がありましたが。

ブランチを作るのは難しいかも知れませんが、民博がもっている協力体制をもう少し広げて、例えば展示会を交換する、という考えもある。コラボレーション、パートナーシップ、というような、ネットワークを作る、これがグローバル化時代のひとつのやり方でしょうかね。

―クライナー先生は谷口シンポジウム文明学部門にも二〇年くらいかかわってこられましたね。あれも海外研究者とのコラボレーションで進めてきたわけですが、今後、ああいう研究をどう継承発展させていったらいいのでしょうか。

それぞれの日本語版、英語版の成果は出ていますし、梅棹先生は最後のまとめを書いておられますけれども、フォローアップが必要だったかもしれません。海外からも人が来て、二〇年で二〇〇人近く参加したでしょう、でもOB会みたいなものがない。梅棹先生の学説がどういう影響を与えたのか、自分で考え直したか、整理したか、そういうことのフォローが必要だったかも知れない。残念ながら谷口財団の予算が切れたので、続かなかった。

―日本では比較文明学会があって、ささやかな企てではありますが、関西支部をたちあげて一年ほど前から定期的な活動を始めています。ローカルな集まりですが、これをグローバル化に対応した国際的なかたちにもっていきたいと考えています。

あの文明学シリーズで民博の学風、民博スクールができるのではないかと思っていたんです。でも、あの歴史を引き継ぐのはなかなか難しいことだと、梅棹先生もおっしゃってました。でも、もういっぺん努力してみてはどうでしょうか。民博の個々の研究はすばらしいけれど、一握の砂は指のあいだからこぼれ落ちてしまう。一致団結して個々の研究を超えたレベルで民博としての研究をさらに進めて欲しいですね。

―メタとトランスの思想が重要で、メタ・サイエンス、トランスナショナル、あるいはトランス・デイシプリナリー（学際的）な取り組みで、文化人類学者だけではない研究者たちと一緒に刺激し合う体制が不可欠ですね。このあたりが先生の今回のお話のポイントですね。

第14回谷口シンポジウム文明学部門（1995年12月11～18日）